

# 東京バッハ合唱団 月報

[第 654 号] 2016 年 12 月号

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101

Tel: 03-3290-5731 Fax 専用: 03-3290-5732 郵便振替: 00190-3- 47604

Mail: office@bachchor-tokyo.jp http://bachchor-tokyo.jp/

BACH-CHOR, TOKYO

Monthly Newsletter No. 654

December 2016

5-17-21-101 Funabashi,  
Setagaya-ku, Tokyo

## 過去のクリスマス演奏会の思い出の一例

### 1995 年・・・「足利YMCA主催〈足利市民クリスマス〉」

大村 恵美子 (主宰者)

12月になると、年末の雑用のあわただしさに蔽いかぶさるように、“クリスマス”の喜び、楽しみへの期待に心が波立ってきます。

合唱団創立 55 周年の新年を目の前にすると、とりわけ過去の回想にひかれる私の現在ですが、今や 10 周年、20 周年、30 周年、40 周年、50 周年の記録の 5 冊を手にした私たちは、それらの内容の中から、「ああ、こんな貴重なことがすでに与えられていたのだ」という、豊かな感謝の念で満たされるのです。

最近、私は、創立 1 周年から、7 月 1 日の創立記念日 (合唱団の誕生日) を祝いつづけてきた、その記録に感動して、詳細はとてども伝えられないけれど、どんどん変貌してきた社会の中で、その一こま一こまに感じながらも、わが合唱団が、多くの方々と共に 7 月 1 日を“共に喜ぶ日”として続けてきたことを、新しい月報にも、再現のためにリストアップすることを思い立ちました (当月報 p. 4. 新年より本格始動)。そして、いろいろな資料を調べてゆくうちに、年ごとのクリスマス会の思い出も、また同様に溢れ出してきました。

ちょうど 20 年前の 1995 年の 12 月には、足利におもむいて、そのYMCAの方々と、やはり心あたたまるクリスマス会をすごしたこともあったのです。月報は、次々と新しい記事をのせて、行く先を照らすのが目標でしょうが、特に現在の時点では、世界中の人間が、新年を、今までにない不安と共に受け入れようとしています。20 年前も、新年 (1995 年) を阪神大

震災とオウム事件という突飛な体験に襲われて始めることになったのでした。1996 年 3 月号の、足利YMCAの諏訪治男様の文章を、久しぶりで読みかえして、私は、読者の皆様にも、このすばらしい思い出をお分けしたくなり、ここにもう一度ご披露することにしようと思います。今年のクリスマスも、同様の生き甲斐と喜びが授かりますように、そして新年が世界中の人間に抛り所を探しあてる意志をもたらしますように、ひたすら祈ります。

月報再録 (月報第 405 号・1996 年 3 月)

### 東京バッハ合唱団への讃辞

諏訪 治男 (足利YMCA)

バッハの楽曲を聞く時、私達日本人には想像するしかないバッハのキリスト教理解に基づく世界観を深く感じさせる所が多く、又それは、いかにも彼を生み育てたドイツの風土と、中世からの深いキリスト教の精神と伝統に根ざしたものが、複合して醸成する香り高いものを思わせられ、しかもそれは、そのまま、聞く側にとっても、神の栄光を讃美する清らかな思いに高められるように思います。

さる 12 月 16 日 (土)、東京バッハ合唱団の皆様には、足利市民会館での演奏をお引受けくださり、本物のバッハの《クリスマス・オラトリオ》を堪能させていただきました。誠に感謝いたします。私たち足利市民にとりましては、皆様のご来演は、1987 年 3 月の足利教会の献堂記念演奏会以来 2 度目でありましたが、あの時の感動を再び味わうことが出来ました。

当日演奏会を大いなる喜びの中で迎えることが出来た方が、音楽による讃美のあり方を味わうと同時に、すばらしい翻訳による歌詞をプログラムで追いながら、深い共感を得て、もう一度読み返し、主の降誕劇を目の前に見るような思いを体験したことを語られ、当日の実行委員の一人としても、私は大変喜びに思ったこととありました。

おそらく、ドイツの聖トーマス教会においてはあの

#### 特別演奏会〈足利市民クリスマス〉

日時：1995 年 12 月 16 日

会場：足利市民会館小ホール

曲目：

・モテット《頌めよ主を 世の民こぞりて》BWV 230

・《クリスマス・オラトリオ》第 4 部 - 6 部 (抜粋)

第 4 部 《ささげん 頌め歌を》

第 5 部 《栄光を 主に歌わん》

第 6 部 《主よ おごれる敵(あだ)に》

演奏：大村恵美子 (指揮) 東京バッハ合唱団

岩瀬英子 (ピアノ)

主催：足利YMCA

《クリスマス・オラトリオ》を今日もなお、18世紀にバッハが演奏を続けて以来、連綿と継承されて来ていることと思う時に、戦後50年目の節目の年に、図らずも惹き起こされた阪神大震災と、サリン事件とが、符合するような日本の現実、あまりにも大きな歴史の落差とも思えるような状況で、人間の破滅を感じさせるものでした。

主宰者の大村恵美子さんの演奏に先だつメッセージの中で、バッハによって示された《クリスマス・オラトリオ》を通じて、神の正義と、愛に支えられた勇気を持つことを示され、またそれがクリスマスだけでなく、新しい年の指針ともなるべきものであることの意味を、深く考える静謐の時でもありました。

特に演奏会の前後、短時間のリハーサル、場所の移動など、日頃の東京バッハ合唱団の皆様の統率のとれた行動には、練習だけではない、精神的な絆の強さを感じ、実行委員としては、不安も消えて本当にそのお心遣いに感謝の拍手をお贈りしたいものと考えた次第です。本当に遠路遙々、素晴らしい演奏会を有難うございました。またいつの日か、この感動を再びお与えくださいますように。

.....

### 足利YMCAのクリスマス

YMCAのお台所から会場のリハーサル室に2度も運びこまれたあたたかいミネストローネ・スープ、チーズ・ホットサンドの昼食と、丹誠こめた夕食弁当。会場正面に高々と掲げられた演奏会の美しく大きな看板。本番のこまかい裏方作業。自家用車分乗の送迎。きめこまかなYMCAの方々のみごとなチームワークぶりに、「みなさんのクリスマス会はいつですか？」と伺うと、「今日のこれが私達のクリスマスなのです」とのお答え。まさに「人に仕える」クリスマスの心の実践なのでした。歌ってこんなにさわやかな感謝の気持ちにみたされて帰ったことが、団員全員にとっても素晴らしいクリスマス・プレゼントでした。ほんとうにありがとうございました。(大村恵美子)



☆☆☆☆☆☆

## あなたは、どんな共感を、東京バッハ合唱団に寄せていらっしゃるでしょうか？

☆☆☆☆☆☆

こんな問いを、団員、後援会員の方々に発してみました。なるべく抽象的でないお答えをいただけるようにと、次の2つの文章に対する感想のような形ででも、という思いで、

- ①独文学者・高橋英夫氏のエッセー「バッハ・エスキス」(小学館『バッハ全集』第11巻pp118-126)
  - ②トーマス教会カントル・ビラー氏への大原哲夫編集長によるインタビュー(同巻付録の月報第3号)のコピーを添えてお聞きしました。
- 最初にとどいた3人の方々のお返事を、ご紹介しませう。(大村恵美子)

### バッハについての思い — 2つの文章を読んで

百鳥 洋子 (団員；ソプラノ)

私は、恥ずかしながら、バッハ論などこれまで読んだこともなく、バッハに関する知識は、浅はかで断片的で勝手なイメージを持っているにすぎません。ですので、2つの文章を読んで、バッハについてこのような観方もあるのかと、素直に納得してしまいました。

私は、数年間バッハを歌ってきて、おそらくバッハが好きなのだと思いますが、なぜかと聞かれたら、言葉ではうまく説明できないのですが、生理的に合うと申しましょか、たとえば、目の前にあったおもちゃで遊んでみたら、とても面白くて、ずっと飽きずに無心で遊びつづける子供のようなものかもしれない…？(誤解を恐れずに言えば)おこがましくも感性がバッハに似ているからかもしれません…？私は、すくなくとも自分では、自分のことをとても合理主義者だと思っている…？

バッハという天才は、内面的・天性的(脳科学的)にまじめ(窮屈)で、暗い闇にも(誤解?)素晴らしい感受性をもっていて、だからこそ、それらの内なる苦悩(きわめて人間的なもの)を、意識的に、屈強なる理屈・論理(聖書)・音楽言語によって理路整然と、神への憧れ、神に希望をおく音楽に昇華させ得たのではないのでしょうか。それゆえ私たちは、バッハの音楽の中に、生きる喜びや光を見いだせるのではないのでしょうか。闇がなければ光はありません。陰と陽、幸と不幸も表裏一体。すべて対照的なものは一体ということではないかと思いました。

見間違いでしたらごめんなさい……。やっぱり、言葉でバッハを論ずるのは、無意味なことではないかと思いました。

白木 博也（団友・後援会員、洋画家）

●トマス教会のカントル、ビラー氏の問いかけに関する答には、知っている事、知らない事を含め、非常に示唆に富んだ内容で感動しました。

ことにバッハ音楽の成り立ちが800年前からのイギリス、オランダ、イタリアからの発展によるものとの件です。やはり伝統というものの重さを強く感じた次第です。又、バッハが当時のニーズに見合ったものを求めた点が作品に重要な要素を加えたと見る見方も同様です。

当時の庶民の生き生きとした時代相とも言うべき素因が加わってこそ、人々を感動させるバッハの音楽が生まれるのだと感じました。

ビラー氏の語る如く「大地に属しているような生きざま、生命そのもの、と深い信仰心との融合」が偉大なバッハ音楽を生んだのでしょう。

●高橋秀夫氏のエッセイ、について

これは全く個人的なバッハ音楽に関する考えなので、軽く読み流すたぐいのもと思います。

とくに河上徹太郎・小林秀雄・大岡昇平のバッハ感です。僕も小林の「モーツアルト」は若い頃、むさぼり読んだ記憶がありますが、当時はまだバッハ音楽が広く普及されていない時代なので、彼等は、今の音楽学生よりバッハを深く体感していないのではないのでしょうか。流暢な文章でつづったバッハ音楽感も、多分に場当り的なものだったのではと思います。

また、高橋氏のバッハ音楽の感想も、「窮屈さ」「暗さ」などを、その本質であるかの如きとらえ方は、非常に一方的と考えるのは、僕ばかりではない様に思えます。芸術に関して、どんな見方、とらえ方も自由ではありますが、やはり、もっと広く深くその根元を考えるべきではないのでしょうか。

（思ったことが100分の1も書けません。悪しからず、お許しを！）

西村 清志（後援会員、元団員）

二つの“バッハ観”、興味深く読ませていただきました。

個人的には、ビラー氏の「バッハの音楽というのは、言ってみれば、大地に属しているような、生きざま、生命そのものと、深い信仰心との融合だと思ふのです。」というくだりに共感しました。また、高橋英夫氏の、バッハを文学的に、直截的に表現しようとする試みは、なかなか至難のここのように思えました。しかし、その多様な思考の行程はたいへん魅力的でした。

ところで、ぼくはずっと、バッハがジャズととても相性がいいことに注目してきました。これはおそらく、バッハのコード進行が大変“乗りやすい”ところに起因しているのだと思うのですが、それはバッハの世俗性（ビラー氏も指摘していますが）から来ているので

はないでしょうか。一般的な宗教曲は上から“ありがたさ”を感じさせてくれますが、バッハは自分と同じ世界から徐々に“乗せられて”、いつの間にか「神の国」へ誘ってくれるような気がします。ピアノ科の女子学生が「やっぱりバッハよ」と言う秘密も、もしかしたらその辺にあるのでは、と思いました。

東京バッハ合唱団特別演奏会

荻窪教会クリスマス・コンサート

## 《ロ短調ミサ曲》のなかのクリスマス音楽、他

[日時] 2016年12月17日（土）、14:00 開演

[会場] 荻窪教会

[入場] 無料（自由献金）：**どなたでもご自由にご来場ください。**

[曲目]

●《キラキラ星変奏曲・福音版》松尾茂春・詞/曲

●カンタータ《われ 足れり》BWV82

●《ロ短調ミサ曲》のなかのクリスマス音楽

〈グローリア〉Gloria

〈地に平和〉Et in terra pax

〈み神に謝しまつらん〉Gratias

〈肉をとりて〉Et incarnatus

〈主は甦りたもう〉Et resurrexit

〈平和をわれらに〉Dona nobis pacem

[出演]

オーボエ：土屋愛菜

ヴァイオリン：中川典子、チェロ：木島洋一郎

オルガン：石川優歌

斉唱と合唱：東京バッハ合唱団

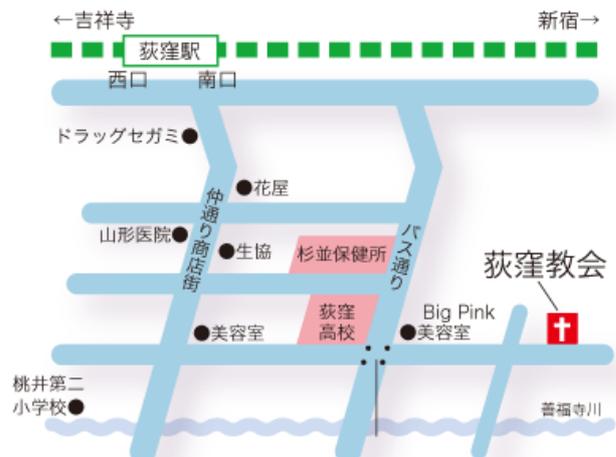
指揮：大村恵美子

### [会場へのご案内]

JR/地下鉄丸ノ内線「荻窪」駅下車、南口より徒歩8分。駐車場の用意はございません。お車でのご来会はご遠慮ください。

住所：〒167-0051 杉並区荻窪4丁目2番地10号

電話：03 - 3398 - 2104



## 55周年を迎える東京バッハ合唱団 創立記念日の思い出を中心にたどる

大村 恵美子 (主宰者)

2017年の年が明ければ、もう間近に迫る7月1日は、東京バッハ合唱団が誕生して55周年となる日です。毎年この日を、私たちは特別の感謝の思いをこめて、祝い続けて来ました。

いま記録をたどって見ると、この誕生日を、始めの頃から、土・日か、週日にあたるかをほとんど意に介せず、「7月1日」と決めこんで、夕刻に、懇親会や講演会などの形で、団員みんなで後援会員や団友、演奏会の聴衆の方々をお招きし、お客に迎えて、楽しんで来たようです。

2002年発行の『東京バッハ合唱団40年の記録』は、合唱団の40年間の活動の丹念な記録を残し、また2015年発行の『東京バッハ合唱団半世紀の歩み』は、『40年の記録』からさらに10年たった活動記録を追加してまとめたものですが、さらにフォトアルバム等の資料面でも充実させたものとなっています。

ここではそれらの中から、毎年行われてきた創立記念祝賀会を主として、定期演奏会、各地(国内・海外)を廻っての特別演奏会などの、特に思い出となる様々なイベントもあげてみようと思います。半世紀という長い期間に、かなり創意に溢れた日々を、多くの方々と一緒に重ねてきたもの、と感慨ひとしおです。ほんの記録のタイトル指示だけでも、50余年分となると思わぬページ数をとられることになり、月報の番号にわたって連載せざるをえなくなりました。一望できないのは不本意ですが、どうぞ悪しからず。

なお、頻繁に出てくる主宰者・大村恵美子のことは、わずらわしく見えますので、O.E.と略して記すことをおゆるしくください。また部分的に、イベントの日時・場所などが記録に抜けていることがあるので、記憶のある方はお知らせくだされば幸いです。

### ●第1年(1962年)

7月1日(日)合唱団練習開始。参加者20名。音頭? 取りピアノ:大村恵美子(以下O.E.と略)。ガリ版刷りの楽譜でBWV1《あしたに輝きたえなる星よ》(日本語訳詞)。O.E.は2年間のストラスブル留学後、芸大作曲科に復学していた。団費は月額300円ときまる。月報第1号もガリ版発行。

11月10日(土)第1回公演。弓町本郷教会。指揮:池宮英才。BWV1とBWV79を「オルガンとカンタータの会」主催のコンサートに加えさせていただく。

12月16日(日)深津文雄牧師の婦人保護施設「いずみ寮」(練馬区大泉)訪問演奏。指揮/ピアノ:小林道

夫。BWV1、79。

### ●第2年(1963年)

1月14日(月)第1回披露演奏会、銀座・美術家会館。BWV1、BWV79。指揮/ピアノ:O.E.。バッハ《イタリア協奏曲》、ピアノ独奏:堀江孝子。これを機会に合唱団後援会が発足。洋画家・田中忠雄氏ら5人の先生方が発起人となって立ちあげてくださる。

2月25日(月)練習は、月曜=銀座、日曜=桜上水(森井宅)と週2回になり、この日から磯谷威先生(芸大講師)の発声練習が始めていただけることになる。

4月13日(土)合唱団主催の第1回定期演奏会、弓町本郷教会。指揮:池宮英才。BWV84、182。

4月22日(月)バッハゼミナール発足、銀座・美術家会館。講師:深津文雄「15歳のバッハ」。

6月15日(土)第2回定期演奏会、弓町本郷教会。指揮:小林道夫。BWV8、182。

7月1日(月)創立1周年記念懇親会、銀座「朝日グリル」。

12月7日(土)第2回定期演奏会、立教大学礼拝堂。指揮:小林道夫、《クリスマス・オラトリオ》I・II・III。

<以下、つづく>

### 第115回定期演奏会

### 《ロ短調ミサ曲》日本語版、再演

### = 参加団員募集 =

<日時会場、決定>

**2017年11月23日(祝)14時開演、杉並公会堂**

東京バッハ合唱団は、来年、創立55周年を迎えます。5年前、内外の合唱界に衝撃をあたえた「日本語による《ロ短調ミサ曲》」の再演をもって、この節目の年を記念することとなりました。

あわせて宗教改革500周年の年、バッハの老舗合唱団としては、敢えてルターの子によるカンタータを撰ばず、ミサ通常文をテキストとした、バッハ畢生の大作をもって、作曲家自身が極めた“普遍”の魂を歌い上げようとしています。ぜひご参加ください。

ラテン語上演経験者、歓迎。「日本語バッハ」の奥深さ、格別です。

◇新規練習開始:2017年1/7(土)荻窪、1/9(月)目白。以降、毎週土曜と月曜。

◇練習時間と会場(どちらにも参加可)

・土曜練習……15:30-17:30、(日本基督教団)荻窪教会(杉並区荻窪4-2-10)

・月曜練習……18:30-20:30、目白聖公会(新宿区下落合3-19-4)

◇応募資格:バッハ音楽が好きな方。合唱経験不問。(各パートの音取りCDを用意、またパート練習も)

◇入団金3000円、団費月額5000円、他に公演経費の一部負担あり。

◇問合せ/申込み:東京バッハ合唱団事務局